頭が下げる・頭を下がる

あるお寺の山門に、次のような言葉が掲げられていました。

　　頭を下げながら人を見下げている
　　自是他非の心が抜けぬから

「自是他非（じぜたひ）」とは、自分が是で他人が非ということです。
つまり、自分は正しくて相手が間違っている、自分は善くて相手が悪い、という心です。
そんな心しか持ち合わせていない私だから、頭を下げながらも相手を見下げてしまうというのです。
山門のこの言葉は、まことに人間の本性を言い当てた言葉だと思います。

頭を下げるという行為は、第三者が見れば一見殊勝そうには見えますが、そんなきれい事だけではありません。

私たちが頭を下げるのは、「ここで頭を下げなかったら自分の立場が悪くなる」とか「頭を下げといた方が自分の得になる」といった場合がよくあります。

たとえば、あの人には今度お世話になるから、今ここで頭を下げといた方がいいだろうとか、あの人は会社の上司だから頭を下げとこうといったように、自分の損得勘定が入ることが多いのです。しかも、「自是他非」の心がありますから、冒頭の言葉のようになるのです。
その心の奥底にあるものは「我執」です。つまり、「自分が一番可愛い」という心です。

阿弥陀さまは、そうした我執を軸に「自是他非」の心を起こさずにはおれない私たちに向かって「そんなお粗末な心しか持ち合わせておらんから放ってはおけないですよ」と、呼び続けて下さっています。

その呼び声（南無阿弥陀仏）を聞いていく時、私たちは「自是他非」の心を捨てられない我が身の愚かさに、「お恥ずかしいことです」と頭が下がります。そうして、愚かな私を見捨てない阿弥陀さまのお心に、「ありがたいことです」と頭が下がるのです。

　「頭を下げる」のではありません。
　「頭が下がる」のです。

その時、私たちの心に「自非他是」の心が生まれてくるのです。それはまさに「我以外、皆、我が諸仏なり」と頂く世界であります。
思えば、私たちは、生きている限り「自是他非」の心をなくすことはできません。しかし、実にそのことが、阿弥陀さまの大悲のお心に出遭うご縁であるのです。

平成１８年１２月　　「光明寺だより４８号」より